

陶における集合体表現について
作品「雪草」及び研究報告書

A consideration about the expression of cluster in ceramics. Work “Snow Grass” and research report.

工芸領域



雪草
Snow grass
陶
200×160×100mm、190×120×80mm、200×150×120mm、180×130×50mm、240×160×70mm、サイズ可変、5個組
2024 年

序論

粘土の塊を、粒（約 1cm×1cm×1cm）という小さな単位に分割する。分割した単位の形を保ったまま、造形を行う。このような行為の連続によって生み出された集合体と呼ばれる形態とは何かを本論では論じた。同時に、超絶技巧や、過装飾として第三者に分類されることの多い集合体表現を改めて、作り手の視点から手法や形態を通し、分析を行うことで集合体表現の可能性を探るとともに、陶素材を用いた集合体表現とは何か、を考察することを本論の目的とした。

第一章 集合体表現とは

本論における集合体表現の定義を行った。同じような大きさのパーツが密集した状態を集合体と呼び、この形状を用いた形態をもつ立体表現を集合体表現と定義した。

第二章 建築という集合体構造からよみとく自身の集合体表現について

レンガ造りや石造りといった集合体構造をもつ建築物について調査し、集合体構造を、になうパーツの大きさや、素材の特性という観点によって筆者自身がつくる陶における集合体表現の考察を行った。

レンガは、元来は土であり、扱いやすいように土に直方体の形と硬さを与えた素材である。土の一定以上の大きさでは形を保てない特性や、人が扱うに容易であるかによって、現在のレンガの大きさになり、集合体構造をになうパーツの大きさが決められていった。石造りの建築物は、構成する石の特性の耐圧性の高さや加工の難しさによって集合体構造の形が決定されていた。調査を踏まえて筆者自身の陶における集合体表現について考察を行った結果、集合体表現を担うパーツの大きさは、制作意図に基づいて決められていることが分かった。また、陶の可塑性に基づいて造形していることが明らかになった。

陶における集合体表現は、パーツの大きさの決定を作家の意図によって行われており、粘土の可塑性に基づいて行われている。また、集合体を担うパーツの大きさの決定は、作家性を担う要素の一つであることがわかった。

第三章 陶における集合体表現における特徴

陶作品における集合体表現を手法という視点から集合体表現を用いた作家たちの分類、分析をおこなった。第一節では、集合体を構成するパーツと支持体について着目し、土台の上に集合体表現を行う作家と、土台を用いずに集合体表現を行う作家に分類し考察を行った。土台の上に集合体表現を行うことで、集合させたい事象を立体として起こすことを可能にした。また、土台がない状態によってパーツの集積をおこなうことにより、形態自身が行為の累積、作家が手を加えた事実が集合体表現になることが明らかになった。

第二節では、集合体を構築するパーツが具象形態か抽象形態かであるという観点で、集合体表現の作品を分類、分析を行った。具象形態の集積による集合体表現では、具象形態が集まることにより生まれる物語性が、作家独自の精神性を表現していることが明らかになった。また、抽象形態の集積による集合体表現では、土の特性を用いた集合体表現がおこなわれており、土の特性を明らかにするものであった。

手法は作家が作品をつくる際に取る手段である。粘土という素材は、素材の自由性が高く、制作する際に、様々な手法で制作ができる。つまり、作家自身が自分の制作スタイルにあった手法や技術を選び取ることができるということである。多種多様な方法がある中で確立された各々の制作方法は、作家自身の考えや表現が強く表れている。

第四章 集合体表現をもちいた作家について

前章を踏まえた上で、ヒダの集合体表現を行っている服部真紀子、小さなパーツの集合体表現を行っている稲崎栄利子の分析から、形態に現れる作家の造形思想を考察した。二人の作家研究を通して、作家の持つ集合体表現の多様性が明らかになった。服部真紀子の集合体は、一見して装飾的であるがその実は土台の形とヒダというシンプルな構成である。土台があることで、ありありと表面の土の動きが見える

ようになり、ヒダを最もよい状態で魅せている。稲崎栄利子の作品は、植物の様なサンゴの様な現実の生き物を彷彿とさせる微細な形態の集合体である。さまざまな生き物が集まることで森や自然、世界が成り立つ構造を作品に見立てており、稲崎栄利子によって生み出された陶による小さな世界である。稲崎は今まで土台となる形に集合体表現を行った作品を発表していたが、近年、土台を持たない動く陶作品を発表した。しかし、作品の集合体のパーツの大きさと小さな形から構成するという集合体構造は変化しなかった。土を見る時の非常に微細な視点と、粘土を扱う際の一単位の大きさは変化しないことが明らかとなった。稲崎の持つ土を小さな単位としてとらえる思想から、必然的に集合体表現に繋がったと考えられる。分析を行った結果、作家独自の視点に基づいて集合体表現が行われていると考えた。

第五章 修了作品報告書

陶における集合体表現を自身の作品「雪草」の制作過程を報告書としてまとめた。過去の制作や今回の制作工程をふまえ、筆者の考える集合体表現の魅力について考察をした。筆者の行う集合体表現とは、時間の累積を視覚化し、形の動きを小さな単位で分割化し表現したものであると結論付けた。

結論

作家が集合体という形態をとるにあたって、作家自身の土への考え方や土に見出している魅力、作品制作における価値観などから制作が始まる。実際に、筆者自身は小さな単位が連続することによる時間の累積の視覚化、小さな単位が積み重なることによって作品自身の形の成り立ちや今後の動きを感じさせる効果があると考えて、集合体表現を行っている。陶による集合体表現は、作家独自が持つ土との向き合い方の形態のひとつであり、表現における手法のひとつであるという考えに至った。それは陶による表現と造形の魅力であると結論付けた。